
仮面ライダーヤイバfinal 雷対影 時空大決戦

ターザン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーヤイバ final 雷対影 時空大決戦

【NZコード】

NZ9300C

【作者名】

ターザン

【あらすじ】

突如現れた謎の4人のライダー組織『シャドウ』
時空を超え今ヤイバの最後の戦いが始まる。

謎のライダー

バコン！！

蒼牙「違つって言つてるだろ…？たたくなよ…？」

アイリ「違つても違つてなくとも一発は叩かせなさい…！」

蒼牙はアイリに頭を叩かれた、理由は一つ、蒼牙のソシャツに口紅がついていたからだ。

蒼牙「はあ・・・プロトにメデューサの次は鬼嫁か・・・」

バコン！！

蒼牙「痛いっ！？」

アイリ「だああれが鬼嫁ですってええ！？」

？？？「お~い。」

家の玄関に龍一が立っていた。

龍一「新婚生活満喫はいいがそろそろ出勤だぜ蒼牙？」

蒼牙「まじかもうそんな時間！？」

アイリ「えつ、今日は休みのはずじゃ・・・」

蒼牙「急に仕事が入ったんだ、『ごめん…』」

蒼牙は龍一と共に家を出た。

アイリ「・・・・・」

アイリはふと結婚式の時の写真を見た。

アイリ「せつかく結婚してずっと一緒にいられるのに仕事ばかりでちつともそばにいてくれない…・・・」

アイリはため息をついた。

アイリ「蒼牙のバカ。」

・・・・・

蒼牙「・・・・・」

蒼牙はいつもより元気がなかつた。

龍一「どうした蒼牙？」

蒼牙「いや・・・せつかく結婚したのにまだアイリのそばにいられてないなって思つてや。」

龍一「仕事場でいつも一緒じゃないか？」

蒼牙「そうじやなくて、私生活でだよ・・・せつかくの休日なのに、悪い事したなあ。」

龍一「へえ、難しいねえ。」

蒼牙は落ち込んだ、するとどこかで銃声が鳴り響いた。

龍一「なつ、何だ!?」

蒼牙「あつちだー！」

2人は銃声の鳴り響いた場所に向かつた。

? ? ? ێ ۏ .

？？？「何だか盛り上がりってきたなあおい！」

？？？「騒ぐのはやめなれ。」

? ? ? 「ん? あれば . . . 」

蒼牙と龍一が現場に駆けつけた。

龍一「警察だ!! 銃声をならしたのはお前達か!?」

? ? ? 「それがどうかしたか?」

蒼牙「お前達を逮捕するー！」

? ? ? 「 · · · 逮捕？」

？？？「不思議な事を言つのねあなた達。」

蒼牙「いいからこひちこ・・・・・？」

すると蒼牙はいきなり胸を押さえ膝をつく。

龍「蒼牙！？」

蒼牙「ぐつ・・・・がつ！？」

？？？「！、貴様・・・・ヤイバか。」

蒼牙、龍「！？」

2人は驚愕した。

蒼牙「な・・・・何で・・・・はあはあ・・・・」

？？？「なるほど！－あんたならわかる・・・・痛つ！？」

？？？「リーダーにそんな口のききかたはやめなさい。」

龍「お前達何者だ！？」

？？？「教えてやろ！？」

？？？達4人はベルトを装着した。

蒼牙「なつ！？」

龍一 「まさか！？」

「？」 「変……身。」

「？」 「へええんしいいん！」

「？」 「変身。」

「？」 「変身！？」

「ヘル・トランス！？」

「デス・トランス！？」

「テッド・トランス！？」

「ブラッド・トランス！？」

4人は光に包まれ姿を変えた。

龍一 「馬鹿な……奴らが……」

蒼牙 「仮面……ライダー？」

蒼牙は何とか落ち着きを取り戻し立上る。

「？」 「三条色！……仮面ライダー『デス』だ！……よろしく……！」

「？」 「南条院マコ、仮面ライダー『テッド』。」

？？？「線条レイ、仮面ライダー・ブラッードー。」

？？？「仮面ライダー・・・ヘル。」

それは外側が黒、内側が赤のマントで身を包み緑の腕、赤い複眼、黄色の一本角、黒い体に緑のラインがある装甲をまとったライダー・ヘル。

黒い体に青いラインがある装甲、逆三角形の仮面、複眼のライダー・デス。

黒い体に黄色のラインがある装甲、黄色の複眼、ハート型のような形の仮面のライダー・バッド。

黒い体に紫色のラインがある装甲、複眼、カブトムシのような仮面のライダー・ブラッド。

蒼牙「何でお前達が！？」

デス「何でついていわれてもよお、変身できんだからしゃあねえだろ？」

バッド「邪魔をしないでもらえる？」

ブラッド「俺達は世界を救いに来ただけだ。」

龍一「なに？」

ヘル「・・・」

ヘルはオオカマを取り出し投げ辺りを破壊しだした。

蒼牙「や、やめりーー！」

龍一「このやめりーー！」

「uhane YAHIA!!」

2人は仮面ライダーヤイバ、ケンに変身しヘル達を攻撃するが簡単に受け止められた。

ヤイバ「何が世界を救いに来ただーー単なる破壊じゃないかーー！」

デス「何だよ邪魔すんのかよー？」

デッド「やるしかないわね。」

ブラッド「ああ。」

ヘル「・・・・・・

4人はヤイバと距離をとつデスはメリケン、デッドはムチ、ブラッドはナイフを構える。

ヤイバ「絶対にとめるーー！」

ケン「あたりまえだーー！」

ヤイバは剣をふるつがそれをデス、デッド、ブラッドが防ぐ、ケンの攻撃も同様に防がれてしまつ。

ケン「あくまでもヘルには触らせないつもりかーー！」

ヤイバ「なら高速だーー。」

「うなごみゅー だあたーー。」

ヤイバはダッシュモードに切り替わり、高速で攻撃を仕掛けれるが

デス「だああああああーー。」
「うんじゅういつひとうしーんだよーー。」

デスは高速移動するヤイバをひとも簡単に殴りつけた。

ヤイバ「ぐあああああーー。」

ケン「蒼牙ーー？」

ブリッヂ「壁ーー。」

ブリッヂはナイフでケンを斬りつけた。

ケン「うわあーー。」
「…」

デシド「せつーー。」
「…」

デシドは遠距離からムチでケンを攻撃する。

ケン「ぐつーー。」
「…」

ヤイバ「龍ーー。」
「…」

「うなごみゅー うなーー。」

ヤイバはサンモードになり炎の翼を広げ空中旋回をしようと飛び上がるが

「トシダ、『やつせ祭』はねがや二二二。」

デッドはムチを放ちヤイバの足に巻きつけ地面に叩きつかる。

ヤイバ「ぐああああああー!?」

ケシヘル・ブルガリ

「テス、『目障りだらあきらか』にい！！」

テスはメリケンをばめ込んだ拳でケンの顔面を殴りつけた。

ケン一

ケンの仮面は砕け散りケンは叫び声もあげず倒れた。

ヤイバ「龍一！？」

ヤイバは三人の攻撃を受け続ける。

ヤイバ「ぐ・・・」

ヘル「弱くなつたものだ・・・私の力も・・・」

ヤイバ「お前の・・・力?」

ヘル「くたばれ。」

ヘルはオオカマでヤイバを斬りつけた。

ヤイバ「わやああああああー!？」

ヤイバは変身が解け倒れた。

アラシ「らん。」

4人は変身を解いた。

「・・・色」ヤイバつて言つから期待してたのにお

マコ「ワガママをいうのはやめなさい。」

レイ「所詮は・・・力不足だつたつて事だろう。」

ヘルに変身していく????は三人に言った。

？？？「行くぞ・・・救済だ・」

4人はヤイバとケンを背にむけ歩きだした。

n
e
x
t
:

シャドウ

謎のライダー達に惨敗した2人、それから数時間後・・・

蒼牙「・・・・くつ・・・」

蒼牙は気づけば病院にいた、横にはまだ目を覚まさない龍一、そして何故か傷ついた榊原がいた。

榊原「大丈夫か?」

蒼牙「さ、榊原さん・・・何で・・・ぐつ・・・」

榊原「4人の黒い仮面ライダーが現れて・・・街を襲って・・・偶然お前達が倒れてるのを見つけたんだ。」

蒼牙「街を!?」

辺りを見ると傷ついた市民が苦しみの声を出していた。

蒼牙「ひどい・・・あれ、アイリは!?」

榊原「アイリさんは・・・家にはいなかつた。」

蒼牙「そ・・・そんな・・・」

龍一「ん・・・」

龍一が目を覚ました。

榎原「龍一、田を覚ましたか。」

龍一「なんだ・・・どうなつてんだ?」

すると

? ? ? 「人間共よ。」

蒼牙達「! ?」

蒼牙達は外を見ると謎の映像が空に映し出されていた。

龍一「あれば・・・あの時の仮面ライダー! ?」

蒼牙「一体何をするつもりなんだ! ?」

映像には4人の黒い仮面ライダーが映し出されていた。

色「よおーー俺達は世界を救済する戦士だ!! 無駄な抵抗は・・・

マコ「わかりやすく説明しなさい。」

レイ「リーダー、頼む。」

? ? ? 「が前に出てしゃべる。」

? ? ? 「我らは『シャドウ』、世界を救済する者だ。」

榎原「救済だと?」

？？？「今世界はつまらない事で戦争をし自ら世界を破壊しようと
している、我らはそれを終わらせに来た。」

蒼牙「なに？」

？？？「世界から破滅から救うためにお前達には少し犠牲になつて
もらつ・・・そして我らに協力する者が現れた。」

シャドウに協力する者が映像にてた。

榎原「なつ・・・」

龍一「ウソ・・・だろ！？」

蒼牙「ア・・・アイリ！？」

それはアイリだった。

アイリ「警告する、死にたくない者はただちにシャドウに協力し服
従せよ。」

蒼牙「アイリ！..何で・・・何で！..・..・..？」

蒼牙は再び原因のわからない胸の痛みを感じ膝をつく。

龍一「お、おい！」

榎原「大丈夫か！？」

蒼牙「はあはあ・・・（何なんだ、これは・・・）

・・・・・

レイ「（）苦勞だな、アイリ。」

色「可愛いわりに結構迫力あつたぜえーー！」

マロ「色、はしゃべのせやめなさい。」

アイリ「・・・」

アイリは何も言わずにその場から立ち去り立つ。

?/??「・・・無駄な抵抗はするなよ。」

アイリ「わかつてゐるわ・・・ねえそれより本当なの?わたくしの話。」

?/??「嘘をつく必要がどこにある?・・・かつて我が同じだった
のだ、間違いはない。」

アイリ「・・・やう。」

・・・・・

少し時間が戻り港・・・

?/??「ありがとうなオヤジさん、まじでお前もお礼を貰へ。」

?/??「ありがとうおじさん。」

オヤジサン「お礼なんていらへんて！…困つてる時はお互い様やないか、タクヤ君に紗耶香ちゃん。」

港には世界を旅しているはずのタクヤと紗耶香がいた。

オヤジサン「それにタクヤ君は命の恩人やからな。」

タクヤ「いや、こしてもまさかオヤジサンがメデューサの残党に襲われるなんて思わなかつた。」

紗耶香「タクヤは変身して助けたんだよね？」

オヤジサン「感謝してるで？でも恩人が金すられたから船に乗せてなんて結構ドジっこなんやな？」

タクヤ「それは言わない約束……！？」

突如空に映像が映し出された。

タクヤ「仮面ライダーにアイリ？世界の救済？何言つてんだ？」

紗耶香はタクヤにしがみつく。

紗耶香「怖い……」

タクヤ「安心しろ。」

オヤジさん「えらー」とになつとるな。」

タクヤ「オヤジさん、紗耶香を頼む。」

オヤジさん「行くんか？」

タクヤ「ああ、久しぶりに骨が折れるかもしないけどな、紗耶香、オヤジさんと一緒にいるんだぞ？」

紗耶香「・・・うん。」

オヤジさん「紗耶香ひやんはまかせときーー。」

タクヤ「頼むー。」

タクヤは街に向かった。

つづく

ヤイバの力

タクヤは街に向かっていた、その途中

タクヤ「！？・・・どこまでついてくるつもりだ？」

タクヤは背後から何者が跡をつけていたに気づいた。

？？？「鋭いなあ、驚いたよ。」

タクヤ「あんた誰だ？」

・・・・・

一方蒼牙はある空き地に来ていた、そう、そこは蒼牙が人間の時最後に来た場所だった。

蒼牙「アイリ・・・どうして・・・」

蒼牙は何故アイリがシャドウと協力するのか考えていた、すると

？？？「蒼牙・・・」

蒼牙「！？」

蒼牙は後ろから誰かに話しかけられた、それはアイリだった。

蒼牙「アイリ！？」

蒼牙はアイリの肩を掴む。

蒼牙「アイリ！－！何でシャドウに協力しているんだ！？」

アイリ「……あなたには関係ないわ。」

蒼牙「関係ある！－・・・まさか俺が原因なのか？俺がいつもお前のそばにいてやれないからか！？教え・・・！」

するとまた蒼牙は原因不明の胸の痛みに襲われた。

蒼牙「ぐつ・・・はあはあ・・・」

アイリ「蒼牙！？」

? ? ? 「苦しいか？」

蒼牙、アイリ「！？」

2人は声がしたほうを見るとそこには仮面ライダーヘル・？？？がいた。

蒼牙「お前・・・ぐつ・・・一体何なんだ！？」

蒼牙は無理やり叫んだ。

? ? ? 「お前は死ぬ・・・ヤイバの力によつてな。」

蒼牙「な・・・に？」

「蒼牙……」

龍一と榎原が蒼牙のもとに駆けつけた。

龍一「お前はたしか仮面ライダーへルー?」

榎原「悪の仮面ライダーか。」

「……」「悪?・・・・我はこの世界を救いに来た、救済に犠牲はつきものだ。」

「……はあくまでも自分が正義だと言い切った。」

龍一「何が救済だ! ! ! アイリ、お前も何で! ?」

アイリ「・・・仕方ないじゃない・・・」

榎原「アイリさん?」

「? ? ?」「教えてやるう、我はかつてその力でプロトを封印した者、セイヤだ。」

一同は驚愕した。

龍一「お前が昔ヤイバだったてのか?」

セイヤ「そう、そしてプロト封印後我は死んだ、ヤイバの力が暴走した事で体が崩壊したのだ。」

榎原「じゃあ今蒼牙の体に起きてるのはまさか! ?」

セイヤ「そう、ヤイバの力の暴走だ、いずれそいつの体は滅ぶだろう。」

蒼牙「じゃあ……お前はなんですか？」

セイヤ「我はこのヘルの力により蘇ったのだ、そして我がかつて命をかけ救つた世界の現状をみて絶望した。」

榎原「現状？」

セイヤ「我は戦つたのだ、この世界から悲しみ無くすために……だが……！」

セイヤは拳をギリギリと握りしめる。

セイヤ「我はこの世界を守る必要なんてなかつた、なぜなら……！」

「いくら頑張つても人間が変わらないからか？」

アイリ「あ……」

龍一「タクヤ！？」

タクヤが蒼牙達の前に現れた。

セイヤ「そうだ！！我がいくら命をえても争いや破壊を人間はやめない、いややめようともしない、だから我が作り替えるのだ、世界の未来を……！」

榎原「未来を変える?」

セイヤ「そうだ、そのために今の人類には滅んでもらう、なあに、新しく美しい世界のためだ人間達もわかるだろう、自分達がやつてきた愚かさを。」

蒼牙「ふざける・・・な・・・」

蒼牙がヤイバスパークーを構えるがタクヤがそれをとめる。

タクヤ「馬鹿、死ぬ気か?」

蒼牙「でも・・・」

セイヤ「お前達は邪魔になる、ここで消えてもいいおつ。」

セイヤがベルトを取り出すが突如炎がセイヤを襲いつ。

セイヤ「!?

?/??「好き勝手言つちやつて!-!」

龍一「なつ・・・今の声・・・まさか!-?」

すると目の前に仮面ライダーケンが現れた、もちろん龍一が変身したわけではない。

龍一「三鳶・・・三鳶なのか!-?」

ケン「おう、久しぶり!-!」

それはかつて死んだはずの龍一の仲間・三鳩大介だった。

ケン「話は後だ、とりあえずこいつを・・・」

セイヤ「予想外だな、一旦ひくか・・・行くぞ。」

アイリ「ええ。」

セイヤとアイリは目の前から消えた。

蒼牙「待て！！」

ケン「無駄だよ追つても、少し休みなよ。」

・・・・・

龍一「三鳩・・・本当に？」

三鳩「俺はウソつかない！！」

榎原「君が龍一に仮面ライダーの力を与えた三鳩大介？」

三鳩「そう、途中そいつに会つてここまで来たんだ。」

そいつとはタクヤの事だ。

・・・・・

数分前

タクヤ「何だお前は？」

街に来る途中タクヤは1人の男に呼び止められた。
その男が三鳶大介だつた。

三鳶「俺は三鳶大介、元スーパー・ネガショッカーの戦闘員で今は・・・
ううん、何だろうな？」

タクヤ「は？」

三鳶「悪い悪い、んで本題だ・・・炎舞龍一つ知ってるか？仮面ライダーの。」

その瞬間タクヤは腰についている護身用ナイフを取り出し三鳶の顔まで持つていき当たる寸前で止めた。

タクヤ「？・・・まばたきすらしないとはただもんじやないな、何者だ？」

三鳶「だから三鳶大介だつて、龍一の仮面ライダーの力は元々俺が開発してあいつに託したんだ、知つてて当然だろ？」

タクヤ「・・・」

タクヤはナイフを腰に戻した。

三鳶「良かつた良かつたわかつてくれて。」

タクヤは三鳶の話を聞いた。

タクヤ「過去から？」

三鳶「ああ、スーパー・ネガショッカーの時間転移装置でな、まあ俺はもうこの時間では死んでるしかたがついたら過去に戻るがな。」

タクヤ「そうか。」

・・・・・

龍一「だが疑問が残るな、過去の時代で何故未来である」この出来事がわかつたんだ？俺に仮面ライダーの力を与えたのも。」

三鳶「スーパー・ネガショッカーには未来を予測できる装置があつてな、一回ぐらい使ってみたんだが・・・最初と内容が変わっていたんだ。」

榎原「まさかシャドウが？」

三鳶「ああ、そこで俺が死ぬのも龍一が仮面ライダーになるのも知つた。」

タクヤ「なるほど、だから助太刀に来たのか。」

三鳶「だが武藤君がこんな状況じゃきついな、ヤイバは最後の希望だからな。」

蒼牙「希望？」

三鳶「仮面ライダー・ヘル・セイヤを倒せるのはヤイバだけなんだ。」

タクヤ「なら難しいな。」

蒼牙「そんな事……！？」

蒼牙は再び苦しみだした。

榎原「苦しみが激しくなつてゐ、まずは場所を変えよう。」

一同は蒼牙の家に向かつた。

つづく

突撃

蒼牙の家

三鷹「とりあえずどうするか・・・おい武藤君、どこのに行く気だ？」

蒼牙はこいつそり家から出て行く気だつた。

榎原「まさかその体で行く気なのか！？」

蒼牙「でもこいつしてると間にもアイリに何かがあつたら・・・」

すると突然龍一が蒼牙を殴りつけた。

龍一「てめえ少しは身の状況を考えろ！！アイリはお前が助けなきゃいけないんだぞ！？お前が死んだら誰がアイリを助けるんだ！？」

蒼牙「でも！」

そこに

タクヤ「悪魔で推測だが、シャドウには蒼牙を助ける方法があるんじゃないかな？」

三鷹「どういう事だい？」

タクヤ「シャドウにはヤイバの力を抑える何がある、だからアイリはシャドウに協力しているフリをしてるとか？」

榎原「確かにアイリちゃんにはプロトの一員だった頃の技術がある、探しだせるかもな。」

タクヤ「とりあえず蒼牙、お前は少し眠つてろ。」

タクヤは蒼牙の腹を殴りつけ気絶させた。

龍一「どうするんだ?」これから。

三鷹「シャドウに攻め込むか?」

榎原「まだ早いんじゃない? ヤイバの力を抑える方法を見つけるまでは。」

タクヤ「とりあえず榎原は蒼牙を見ていてくれ、後は俺たちがなんとかする。」

榎原「わかった。」

タクヤ、龍一、三鷹は家を出た。

・・・・・

その頃

アイリ「・・・違つ・・・これでもない・・・これも・・・」

色「お~い!~」

アイリ「!~?」

アイリは手に持つ何かを後ろにして隠した。

アイリ「な、何！？」

色「？」お前今何を隠した？」「

アイリ「べ、別に・・・何も？」「

色「なんか怪しいなあ？」「

アイリは若干冷や汗をかいいていた。

色「まあいいや。」「

色はその場を去った。

アイリ「危なかつた・・・えっと・・・ん？」これってもしかして・・・

・
・
・
・
・

龍一「よくよく思つたけどシャドウがどこにいるかわからんの」
俺たち突つ走つてたな（汗）」「

タクヤ「・・・ダメだ気配を感じ取れない。」「

三鷹「うーん・・・そういうば映像流れた時に映つてた風景・・・
なんか心当たりない？」「

龍一「映像の風景?」「

龍一は記憶をたどる。

龍一「あつ、あれは確か・・・」

三鷹「知ってるのか?」

龍一「ああ、警察署だ。」

タクヤ「警察署?お前が所属している?」「

龍一「そうだ、行こ!つーーー！」

龍一達は警察署に向かつた。

・・・・・

龍一達が警察署に向かつ途中携帯電話がなつた。

龍一「ん? 榊原か?」

それは榊原からの電話だった。

榊原『大変だ龍一! 蒼牙が窓ガラスを突き破つて逃げ出した! !』

龍一「なに! ?」

三鷹「ダイナミックだねえ武藤君は。」「

龍一「感心してゐ場合かー? まさかあいつも警察署にー?」

榎原『映像の風景に見覚えがあるって言つてたから恐いりぐーー』

するとタクヤが龍一から携帯電話を奪つた。

龍一「あ、おい!—」

タクヤ「後は俺達に任せろ、榎原は市民の避難を頼む。」

榎原『わかつた!』

タクヤは電話をきり龍一に返した。

タクヤ「奴も俺達も行く場所は同じだ、ビツセ鉢合せになる。」

龍一「なんとしても止めないとな。」

三鷹「そうだな。」

・・・・・

一方

蒼牙「はあ・・・まだだ・・・アイ・・・リ・・・くうーー」

蒼牙は再びヤイバの力に襲われ膝をつく。

蒼牙「はあ・・・まだだ・・・アイ・・・リ・・・くうーー」

蒼牙は無理やり立ち上がり警察署に向かった。

蒼牙「へや・・・遠く感じる・・・!」

警察署が見えてきたあたりで龍一達がいた、まだ気づかれていない
よつだ、蒼牙は物影に隠れる。

龍一「蒼牙はまだ来てないのか?」

タクヤ「足跡がないな、そうみた。」

・・・・・

蒼牙「近づけない・・・ぐつ・・・」

蒼牙は胸をおわく。

・・・・・

三鳶「俺達はどうすんの?先行くのか?」

タクヤ「蒼牙にかんしては・・・まあ・・・」

タクヤ達が悩んでいると

? ? ? 「諦めがないのね。」

タクヤ達は警察署のまつを向くとマコがいた。

マコ「じつに」と嫌われるわよ?」

龍一「悪いな、嫌われようが何だらうが関係ないんだよ。」

タクヤ「俺は先に行く。」

三鷹「・・・んじゃ俺は龍一と頑張りますか。」

龍一「2人のケンか、よし。」

龍一と三鷹にベルトが現れる。

龍一、三鷹「変身ーー！」

2人は炎に包まれ仮面ライダーケンに変身した。

ケンM「ローマ字付きか。」

ケンR「何がだ？」

ケンM「何でもない。」

タクヤは警察署に向かつた。

マコ「あなた達はここで葬るわ。」

マコはベルトを装着する。

マコ「変身。」

マコは仮面ライダーデッドに変身しムチを構える。

・・・・・

タクヤは警察署の中に入った、しばらく進むと誰かが横たわっていた。

タクヤ「ん？・・・そ、蒼牙！？」

それは激しく息切れをする蒼牙だった。

蒼牙「はあはあ・・・よお・・・タクヤ・・・」

タクヤ「お前どうやって・・・」

蒼牙「裏に回つて・・・非常口から・・・ぐあ！」

蒼牙は既に限界に近づいていた。

タクヤ「馬鹿……お前が死んだらどうするんだ……」「おとなしくして・・・」

すると蒼牙はタクヤの胸ぐらを掴んだ。

蒼牙「頼むタクヤ……」これは……俺がかたをつけなくちゃいけないんだ！！アイリは俺が助けなくちゃいけないんだよ……アイリが俺を助けようとしてるならなおさら……」

タクヤは今にも開じそうな蒼牙の田から発せられる気迫を感じた。

タクヤ「だがもしやイバに変身してお前が死んだら……お前は最

後の希望なんだぞ。」「

蒼牙「なら・・・すぐに終わらせねえ・・・俺はプロトもメテコーサを倒した・・・仮面ライダーだぜっ。」

タクヤ「！――！」

その言葉にタクヤは決心した、こいつを止めるのは止めよう、やがて止めるのが止めるのは止めよう、そこには止めるのは止めるのは止めよう。

？？？「お話は終わったか？」「

そこにはレイがいた。

タクヤ「蒼牙、行け。」

蒼牙「ああ。」

蒼牙は何とか立ち上がり奥へ向かっていった。

レイ「止めないのか？」「

タクヤ「ああいう馬鹿には何言つても無駄だしな、それに・・・」

タクヤはシャイバボルターを取り出した。

タクヤ「ああいう馬鹿にしか出来ないんだよ・・・ヘルを倒すのは

！――！」

タクヤはシャイバボルターを装着する。

タクヤ「変身！..」

タクヤは仮面ライダー・シャイバに変身した、レイもベルトを装着する。

レイ「変身！」

レイは仮面ライダーブラックに変身した。

つづく

突撃（後書き）

次回、謎の仮面ライダーが登場！！

炎、黒雷、そして神

「デッド」はあ……

デッドは鞭を振るう、ケンMはそれをかわしデッドとの距離をつめる。

ケンM「ふつーほつーつわあー!?」

しかし鞭が顔面を直撃した。

ケンR「鞭にかんしては名人だな。」

デッド「諦めなさい。」

ケンR「だから俺達は諦めが悪いんだよーー！」

ケンRがリングを上空に投げると炎の龍が現れリングに宿りメダルとなつた。

ケンM「へえ、進化したなあ。」

ケンRはメダルをベルトに付け回すと全身が炎包まれドラゴニカフオームになつた。

ケンR「いひからが本番だーー！」

・・・・・

シャイバ「はあ……」

ブラッド「ふつー。」

シャイバは剣でブラッドの振るつナイフをはじく。

シャイバ「危ない危ない。」

ブラッド「わかつてこむようだな。」

シャイバの使う剣はブラッドのナイフと比べリーチが長くブラッドが不利に思えるがリーチが長い分接近戦にむいているナイフはある程度距離をつめると剣が不利になる、どっちも油断出来ない状態なのだ。

シャイバ「ふところに入られたら終わりだよな。」

ブラッド「悪いが……入りせんりつー。」

ブラッドがナイフを構え走ってきた。

シャイバ「ぐつー。」

シャイバは剣を振るうがブラッドは体を仰け反らせてかわしシャイバの剣を蹴り飛ばした。

ブラッド「はあ……」

シャイバ「やばー。」

シャイバはとつそにマフラーを外しブラッドの腕に巻きつけ投げ飛ばした、ブラッドはうまく体制を整えて着地する、シャイバはマフラーを巻き直す。

「ブリッジ」「ヒヤヒヤしたろ?」

シャイバ「ああ、一瞬真っ青になつたよ。」

シャイバは剣を拾い上げ構える。

・・・・・

蒼牙は映像に映っていた背景のある場所・署長室の田の前で来た。

蒼牙「はあはあ・・・！」だ。」

そこ

? ? ? 「もついねえよ。」

蒼牙「！？」

そこには色がいた、既にベルトを巻いていた。

色「セイヤは別の場所に行つたぜ、まあこじりなんだ・・・へえ
ええんしいいん！！」

色はテスに変身、蒼牙の胸ぐらを掴んで飛び上がり天井を突き破つて屋上まで来た、そして蒼牙を乱暴に投げ飛ばした。

蒼牙「ぐつ・・・くそ・・・」

デス「どうする気だろ? あの女連れて。」

蒼牙「ア・・・アイリを? ・・・ぐつー?」

ヤイバの力は徐々に蒼牙の体を蝕んでいく。

デス「あ~あ、あんな女の事より自分の心配すればあ?」

蒼牙は拳を握り締めた。

蒼牙「うるさい・・・アイリは・・・俺を支えていてくれた・・・
いつつもどんな時でもな・・・」

「あなた、名前は?」

・・・・・

「あなたは世界で一人だけの武藤蒼牙なのよ?」

・・・・・

蒼牙「お前に・・・あんな奴呼ばわりする資格はねえ! -!」

デス「あ~あ、ひどい・・・」

デスはメリケンを手にはめる。

デス「樂にしてやるよ。」

蒼牙「くそ・・・」んな所で・・・」

デスが蒼牙にゅっくり近づいていく。

デス「ガツンと思いつきり・・・!？」

蒼牙「！？」

すると突然空から一筋、一筋と光が差し込む。

蒼牙「な、何だ？」

デス「眩しつ！？何だ一体？」

光から一人の人のような影が現れまるで神のように舞い降りた。

? ? ? 「・・・よく苦しいのに頑張るな、お前。」

デス「何だお前？」

その人物は金髪で青い瞳をし、全身白い正装の男だった。

蒼牙「えつ・・・危ないから早く逃げて！！」

? ? ? 「いや、逃げるつもりはない。」

デス「かつこいい出方で正義の味方をどりかあ？」

？？？「はあ・・・正義とか悪とか関係ないんだよ、ただお前達のやつてる事が気にくわないんだよ。」

？？？はバックルと十字架のような物を取り出しバックルに十字架をはめふたを閉じるとベルトがのび腰にまかさる。そして両手をゆっくり下から上へ回し胸元にクロスしとめる。

？？？「変身。」

？？？はそつ眩き両側のスイッチを押す。

「オープソフォームーー、ゴッドーー。」

ベルトからボイスが発せられると金の十字架が？？？の背後に現れると同時にその十字架は？？？の体を包み姿を変えた。

蒼牙「なつ・・・」

デス「ええー？」

その姿は金の体に銀の装甲、胸の中心に赤い十字架、金の頭部に銀の細いX字の仮面がつき赤い複眼があつた。

デス「ま、眩しいんだよー！」

デスは？？？に殴りかかったがゴッドはそれがあつさりとかわし蒼牙に駆け寄る。

？？？「大丈夫か？」

蒼牙「あ、頬は？」

？？？は蒼牙を起きたがらせる。

？？？「俺は仮面ライダーゴッド、早く行け。」

蒼牙「あ、ありがとう。」

蒼牙はバイクとサーフィンを携帯で呼び出し合体せせる。

デス「行かせるか！？」

デスは襲いかかるがゴッドがそれを受け止める。

ゴッド「はあ……」

ゴッドはデスを蹴り飛ばす。

デス「ぐあー？」

ゴッド「これでどうだ？」

ゴッドは胸元に手を持つていくと赤い十字架が現れる、そして銀の十字架をはめ込むと槍に変形した。

ゴッド「だあ……」

ゴッドはデスを槍で攻撃する。

「デス「この・・・おうああーー!」

デスはゴッドを殴りつけるが槍で受け止めデスの胸ぐらを掴み投げ飛ばした。

デス「ぐあああー!?」

デスは地面に叩きつけられる。

「ゴッド「まだいたのか、早く行け。」

蒼牙「あ、ああ。」

蒼牙はバイクに乗り飛び立つ。

デス「こ・・・このやうおおおーー!」

ゴッドは槍の銀の十字架を外し槍から十字架に戻す、そしてバックルの十字架を取り付ける。

「ゴッド・パワーーー!」

ゴッドの十字架が金に輝きだす。

デス「やああああああーー!」

ゴッド「トヤアアアアアーー!」

ゴッドは十字架を構え投げつけそれがデスのベルトに直撃した。

デス「ぎやあああーー?」

デスはベルトが破壊され消滅した、ゴッドの手に十字架がブーム亿万のよつて居る。

「ゴッド「・・・わ帰るか、早くしないとあこひのせいかりな。」

「ゴッドはその場から消えた。

・・・・・

シャイバ「はあーー！」

「ゴッド「ぐつーー？」

シャイバはゴッドを蹴り飛ばした。

「ゴッド「なかなかだが・・・」それで最後だ。」

ゴッドのナイフが赤黒く輝く。

シャイバ「勝負だ。」

「SYAIBA char 599ーー！」

シャイバの剣も赤黒く輝く。

「ゴッド「はあーー！」

シャイバ「だあーー！」

「 ブラッドがナイフを突きだすがシャイバがそれを剣で弾き返し懐を斬りつけた。」

「 ブラッド「ぐつ・・・」

「 ブラッドは消滅した。」

「 シャイバ「はあはあ・・・よし。」

「

「 デッド「ホラホラどうすのよへ。」

「 デッドは鞭を振る。ケン達を近づけさせない。」

「 ケンR「んなひもーー。」

「 デッド「なつーー?」

「 ケンM「ナイスーーだあーー。」

「 ケンMは拳から炎を発してデッドを殴つた。

「 デッド「ぐうーー?」

「 ケンR「行くぞ!!鳥ーー。」

「 ケンM「おつーー。」

2人のケンは足に炎を発してデッドを蹴り飛ばした。

ケン M、R 「おりやあああ！！」

デッド「さやあああ！？」

デッドは炎に包まれて消滅した。

つづく

炎、黒雷、そして神（後書き）

「ゴッドはW foreverでいうとオーズサイドです

ケジメ

蒼牙はバイクで飛行していた、しかしヤイバの力は着々と体を蝕んでいた。

蒼牙「く・・・もしかしたらあそこ・・・」

蒼牙はある場所に降り立ち既に限界をむかえている体を無理やり動かし歩く。

・・・・・

セイヤ「ここには知ってるだろ?」

アイリ「ええ、あなたがプロトを封印した場所。」

セイヤとアイリはかつてプロトが封印された山に来ていた。

アイリ「ここには不思議な力はあるけど何をするつもりなの?」

セイヤ「プロトを復活させる。」

アイリは驚愕した。

アイリ「プロトを復活って・・・気は確かなの!?それに首領はマダラ達は蒼牙達に倒されて・・・」

それを遮るよつこセイヤが言った。

セイヤ「ここにある不思議な力は・・・ヤイバの力だ。」

アイリ「えつ？」

セイヤ「混乱しているようだな、説明してやる。」

・・・・・

かつて私はここでプロト首領と決戦を繰り広げていた、一步も譲れない騒然なものだった。

首領「はあはあ・・・・

ヤイバ「はあはあ・・・・だあ！――

首領「！？」

私は渾身の力で首領に一撃を『えてヤイバの力をこの山に蓄積しプロトを封印した、そして・・・

ヤイバ「よし・・・ぐつ！？ぐああ！？」

体に残ったヤイバの力は我の中で暴れ出し我が消滅すると同時にどこかへ飛んで行つた。

・・・・・

アイリ「もしかしてそれを偶然生きていたマダラ達が？」

セイヤ「そうだ、そして・・・・

セイヤは石で出来た剣を地面に突き刺した。

セイヤ「今こそ蘇れ、プロトよー！」

石の剣には山に蓄積されたヤイバの力が集まり何かを目の前に放つた。

アイリ「そんな・・・悪しき力を持つものには力は使えないはず・・・」

セイヤ「これは我的力だ、最終的に扱えるのは我だ。」

石の剣から放たれた何かはだんだん見たことのある姿に変わつていった。

アイリ「あ・・・ああ！？」

そしてそれは完全に現れた、アイリは声を出せない。

セイヤ「久しぶりだな、プロトの諸君。」

モグル「ああ、なんか体なまつたなあ。」

カーズ「まさかヤイバに復活させてもううなんてね。」

セイヤ「今はヤイバなどではない、ヘルだ。」

マダラ「そうだな、お？アイリじゃないか。」

「アイリ「ひ、久しぶり……」

セイヤ「彼女にあまり近づくなよ？あそこそこ居る奴がなにかひとつの
せいからな。」

「回「ーー？」

セイヤが指を差した所には蒼牙がいた。

蒼牙「おお・・・・」

アイリ「蒼牙ーーー」

アイリが蒼牙に寄り添う。

アイリ「蒼牙・・・こんなになつてまで・・・」

蒼牙「へへ・・・たり・・・前だ。」

蒼牙は言葉も話すのがやつとだつた。

モグル「どうするんだい？」

カーズ「こにはやつたほうが良いんじゃないかしらへ。」

マダラ「確かに。」

セイヤ「いや、まだあいつはやつてもらわなければならぬ事が
ある。」

セイヤは石の剣を引き抜いた。

セイヤ「アイリ、これで奴を殺せ。」

セイヤはアイリの足下に石の剣を投げる。

セイヤ「それで奴を殺しヤイバの力を吸い取れ。」

セイヤの石の剣にはヤイバの力を吸い取る力があるようだ、アイリはそれを持ち上げる。

モグル「お?」

カーズ「ふふつ」

マダラ「ほお。」

蒼牙「！・・・はあ・・・」

蒼牙は既にあきらめかけていた、どちらにせよヤイバの力がアイリの石の剣で殺されると感じていた。

アイリ「・・・」

蒼牙「・・・」

アイリ「・・・馬鹿。」

蒼牙「えつ?」

アイリは剣を投げ捨て何かを取り出した、青い小さな水晶だった。

セイヤ「ん?」

アイリ「飲んで。」

蒼牙「・・・?」

アイリ「早く飲みなさいーー!」

アイリは強引に蒼牙に青い水晶を飲み込ませた。

蒼牙「んぐー? げほげほー! お前いきなり何を・・・」

アイリ「気分は?」

蒼牙「良いわけ・・・あれ?」

蒼牙は異常に氣づいた、さつきまでの苦しさが嘘のように無くなっていたのだ。

マダラ「お、おーーどうなつて・・・」

セイヤ「まさか・・・お前・・・だがどうやって・・・」

アイリ「せつよ、蒼牙からヤイバの力を消滅させたわ、でも・・・
蒼牙はヤイバになれる。」

蒼牙「アイリ、どうこう・・・」

アイリは説明をした。

・・・・・

私はあいつらの所に潜入してある事を調べてたの、ヤイバの力を抑える方法は無いからって、でも結局無かった、それである時・・・

アイリ「もう!…どうしたら良いのよ・・・ヤイバの力を抑える方法なんて・・・無いのかしら、せめてヤイバの力を消滅させられたら・・・消滅?」

アイリはふと『ディリー』モードとタッチプレスを取り出した。

アイリ「破壊の戦士の力・・・もしかしたら・・・

・・・・・

アイリ「この『ディリー』モードにはある破壊者の力が組み込まれている、その力を青い水晶に凝縮させて蒼牙の体内にあるヤイバの力を破壊したのよ、おかげでこの『ディリー』モードは空箱みたいになっちゃつたけど。」

セイヤ「考えたな、だがどうする? ヤイバの力を体内から無くしても再び変身すればまた体内にヤイバの力が入り込むんだぞ?」

しかしアイリには戸惑いの様子がみられなかつた。

アイリ「私も最初はどうしようかと思つたけどびっくりしたわ、青い水晶が体内に残るつてわかつた時は!-!」

セイヤ「な、何！？」

蒼牙「じゃあ、まさかアイリ！」

アイリ「ええ、アイリはヤイバの力をコントロール出来るようになつたも同然なの。」

蒼牙は青い水晶を飲み込んだ事でヤイバの力を自由に使う事が出来るようになつたのだ。

アイリ「蒼牙、あなたは最後の希望・・・だから・・・」

蒼牙はアイリの手を握る。

蒼牙「信じて正解だぜ、さすが俺の妻だな。」

アイリ「・・・ならあなたも絶対に勝ちなさい、私の夫なんだから。」

蒼牙はヤイバスパークーを装着する。

蒼牙「当たり前だ、セイヤ！・・・」

蒼牙はセイヤを指差す。

蒼牙「お前は俺が絶対に倒す、覚悟しろ！・・・変身！・・・」

「change YAIWA！！」

つぶく

ヤイバ復活

「change YAIWA!!」

蒼牙は仮面ライダー・ヤイバに変身した。

ヤイバ「今日がお前達の・・・命だ。」

ヤイバは剣を構える。

モグル「へっ、病み上がりに何が出来るーー。」

モグルがヤイバに殴りかかる。
しかしヤイバはそれをかわす。

ヤイバ「はああああーー！」

そしてモグルを斬り捨てる。

モグル「ぐあつー!?」

カーズ「はあーーー！」

マダラ「ふつー！」

カーズとマダラもヤイバに襲いかかりヤイバは3対1の不利な状況になつた。

ヤイバ「おるあーーーだあーーー！」

カーズ「ぐつー！？ああ！？」

マダラ「ぐおつー！？ば、バカな・・・」

モグル「何でだよ、何でだよー！？あいつあんなにフラフラだつたじやねえか！？」

プロトの幹部は3人がかりでもヤイバにかなわなかつた。

セイヤ「・・・」

ヤイバ「アイリー！？・・・いつも悪いなあ！？」

アイリ「えつ？」

ヤイバ「いつも何かあつてそばにいてやれなくさー！？」

アイリ「蒼牙・・・わかつてるならさつと終わらせて時間作りなさいー！」

ヤイバ「わかつたよー！？行くぜー！」

「change dashー！」

ヤイバはダッシュモードに変わりモグルに高速攻撃を繰り出した。

モグル「ぎゅあああああー！？」

ヤイバ「はああああー！」

モグルは爆散した。

カーズ「！」のぉーーー！」

カーズは水の光線を放つ。

「chan goe sunーーー！」

続いてヤイバはサンモードに変わり光線を剣で斬り裂き炎の翼を広げ飛び上がった。

ヤイバ「うらあああーーー！」

ヤイバは急降下し剣に炎をまとわせ真上からカーズを真つ二つに斬り裂いた。

カーズ「きやあああーーー？」

カーズは消滅した。

マダラ「おのれえーーー！」

マダラは爪をたてヤイバに襲いかかる。

ヤイバは通常の姿に戻る。

ヤイバ「最後だーーー！」

「YAI BA chan goeーーー！」

ヤイバは足に電撃をためる。

マダラ「！」のぉ……」

ヤイバ「だりやあ……」

ヤイバはマダラの懷に蹴りを放つ。

マダラ「があ！？」

アイリ「やつた！！」

マダラは雷と共に消滅した。

セイヤ「ひづ……」

セイヤはベルトを既に装着していた。

セイヤ「変身。」

セイヤは仮面ライダーヘルに変身した。

ヤイバ「アイリ、下がって。」

アイリ「ええ。」

アイリは下がりヤイバを見守る。

ヘル「どうやら完全にヤイバの力を使いこなせるようだな、大した奴だ。」

ヤイバ「アイリのおかげさ。」

ヘル「ふん」

ヘルは大鎌を構える。

ヤイバ 来るか・・・」

ヘル一はああめ！」

ヘルは鎌を振り回す、ヤイバはそれをかわし反撃を試みるがヘルは持ち手でヤイバを突き飛ばした、ヘルは鎌を振るいヤイバはバク宙でそれをかわす。

ヤイバ「勝負だ。」

Change management

ヤイバは最強フォーム・ライティングになりさらりと雷から剣を作り出しヤイバブレードと雷の剣の一ノ刀流になる。

ヘル「へあああーー！」

ヘルは鎌を投げつける。

ヤイバ「うおつー？」

ヤイバはそれをかわすがなんと鎌はブーメランのようにかえつてき
た。

ヤイバ「追尾！？」

ヘル「終わりだあー！」

鎌がヤイバを襲うがヤイバは剣を振るう。

ヤイバ「だああー！」

ヤイバは飛んでくる鎌を斬り裂き回避したのだ。

ヘル「何！？」

ヤイバ「行くぜーーーおらあーーー！」

ヤイバはヘルを二刀で斬りつけ追い詰める。

ヘル「ぐあつーーー！」

ヤイバ「さあてーーー最後だーーー！」

ヘル「まだだ、うおおおおおおおおおおおーーー！」

ヘルは雄叫びをあげると山が震えだした。

アイリ「きやあー？」

ヤイバ「な、なんだー！」

すると地面からヘルに向かって雷が放たれヘルの体に入り込む。

アイリ「あれって・・・ヤイバの力！？」

ヤイバ「まだここに残つてたねか！？」

ヘルからはおぞましい赤黒い光を放ちながら赤い翼をひろげ飛び立つ。

ヤイバ「ヘルとヤイバの力をひとつにしたのか！？」

ヤイバは携帯でバイクを呼び出しアイリを乗せた。

アイリ「そ、蒼牙！？」

ヤイバ「ここは危険だ！！離れろ！！！」

アイリ「そんなこと！？」

ヤイバはバイクのスイッチを押し飛び立たせた。

アイリ「蒼牙！？」

ヤイバ「心配すんな！！必ず戻る！..」

すると赤い鞭のような光がヤイバを縛り上げる。

ヤイバ「ぐつ！？」

その鞭はヘルの物だった。

ヘル「ふん！…」

ヤイバ「うわあ！…？」

ヤイバは引き上げられた。

ヘル「この力、もはや我にも止められない…」

ヤイバ「哀れな奴だな、世界を破壊しようとして自分の力で身を滅ぼすなんてな…！」

ヘル「黙れ！…」

鞭からとてつもない力が発せられた。

ヤイバ「ぐあああああ！…？」

ヘルは空中でヤイバを鞭から解くが落下せらる間も「えないうに
鞭を叩き込む。

ヘル「これは破壊ではない復興だ！…貴様も同じように思つてゐ
だれう！…？」

ヘルは再び鞭でヤイバを縛り上げる。

ヤイバ「ぐつ・・・いや、この世界も悪くないぜ？」

ヘル「何？」

ヤイバ「どんな状況になつても俺の事を愛してくれる奴がいるから

「な、悪くないぜ？」

ヘル「愚かな、死ねえ！！」

ヘルは鞭に沿る巨大な光線を放つた。

ヤイバ「ぐあああ！？」

ヘル「死ねええええええええええええええええええ！」

声援

アイリを乗せたバイクは着陸しアイリはバイクから降りる。

アイリ「蒼牙……」

「アイリ！！」

そこに龍一、榎原、タケヤがたどり着く。

桜原一
住民の避難は何か終わつた。

アイリ、そう……蒼牙!?」

空を馬上に立とヘルに苦しみめらるセイハの姿があつた

龍一
やはいそ

タクヤ

•
•
•
•
•
•

ヤイバ「ぐああああああ！？」

ヘル「はあああああーー！」

ヤイバはヘルの攻撃を受け続けていた。

•
•
•
•
•
•
•

アイリ「蒼牙、負けないで！！！蒼牙！！！」

榎原「蒼牙！！！頑張れ！！！」

龍一「こんな所で終わんなーーー！」

タクヤ「待ってる人がいるぞ、蒼牙！！！」

・・・・・

？？？「おおーー？ そう君が危ないゾーー！」

一方とある家族がヤイバの戦つている姿を見守つていた。
それはかつてヤイバと共に世界を救つた野原しんのすけとその家族
だった。

ひろし「頑張れ蒼牙君！！！」

みさえ「私達が応援してるわよーーー！」

ひまわり「たやあーーー！」

シロ「ワンーーー！」

しんのすけ「そう君負けるなあーーーファイアアアアーーー！」

・・・・・

？？？「あれは蒼牙さんーーー？」

また別の場所では大勢の少女達がいた、それもかつてヤイバと共に世界を救ったプリキュアである。

なぎさ「頑張つて！！」

咲「私達がついてる……」

のぞみ「負けないで……」

つぼみ「蒼牙さんが勝つと信じています……」

響「いけええ！！」

ラブ「頑張つて……蒼牙さん……」

・・・・・

港では

オヤジさん「頑張れ仮面ライダー！！！」

紗耶香「仮面ライダー！！！」

・・・・・

ヤイバ「ぐああ……！？」この力は……

ヘル「な、なんだ！？」

「頑張れええええええ！」

「負けるなあああ！」

「いけええええええ！」

その時ヤイバのベルトの水晶が輝きだした。

ヘル「なに！？」

ヤイバ「うおおおおお！」

そしてヤイバはヤイバブレードにサンステイックを取り付けた。

「chance lightning sun！」

ヤイバはサンモードになつたと思うと仮面が半分に割れ耳元に移動、サンモードの黄色い複眼は赤くなり金の体に赤い装甲、背中に金の翼を広げ見たことのない姿になつた。

ヘル「何だと……」

ヤイバ「太陽と雷……」
「これは……」

ヤイバは未知の力を持つ姿、ライトニングサンモードになつたのだ。

ヘル「くう・・・うおおお！」

ヘルは翼を広げヤイバに襲いかかるがヤイバはヘルを殴りつけ地面に叩き落とした。

ヤイバ「うひあー！」

ヘル「ぐああー！？」

ヘルは地面に叩きつけられる。
ヤイバは静かに地面に降りる。

ヘル「ば、馬鹿な・・・はあー！」

ヘルは殴りかかる、ヤイバはそれを片手で受け止め反撃をする、ヘルがそれをかわし鞭を振るうがヤイバはそれを側転とバック転でかわし剣を構える。

ヤイバ「終わりだ・・・お前の野望も・・・思いもーー！」

ヘル「ほざけーー！」

ヘルは鞭を投げ捨て翼を広げたと思いつと羽が無数に散らばりヤイバを襲つ。

ヤイバ「はあああああーー！」

ヤイバは炎と雷を剣にまとわせ振るい羽をすべて斬り捨てた。

ヘル「何ーー？」

ヤイバ「はーー！」

ヤイバは金の翼を広げ飛び上がる。

「SUN chargeーー！」

「Lightning chargeーー！」

2つの力を片足にまとわせ突き出しヤイバは急降下する。

ヤイバ「はああああああああああああああああーー！」

ヤイバの技はヘルに直撃した。

ヘル「ぐああーー？き、貴様・・・世界を人類の好きにさせりつゝり
かあーー？」

ヤイバ「違うーー！お前もヤイバだつたならわかるだろーー？かつて何
故人々を助けていたのか、何故世界を守っていたのかをーー？」

ヘル「人類を守っていたわけだとーー？」

ヤイバ「そうだ、思い出せーー！ヤイバーー！」

ヘル「ぐああああああああーー・・・・

・・・・・

『現れたな、プロトーー！』

『ヤイバだーー！』

『ヤイバが助けにきてくれたぞー！』

『ヤイバ頑張つて！！』

我・・・俺は・・・人類が許せなかつた・・・

・・・・・

蒼牙が倒れているセイヤの上半身を起こし抱える。

セイヤ「俺は必死に守ってきた、笑顔、優しさ、命・・・だが人類はそれを無視するかのように・・・奪い合つていた・・・何故・・・でも」

セイヤ「・・・何だ？」

蒼牙「それを支えてくれる人達が俺にいた・・・だからこそ今まで人類に幻滅せずやつてこれたんだ。」

セイヤ「仲間・・・という者達か・・・」

蒼牙「お前も・・・どこかでそんな人達と出会つていれば・・・俺と一緒に戦ってくれる仮面ライダーになつていたはずだ。」

セイヤ「・・・ははは・・・そつかもなあ・・・また笑顔とかのために戦いたくなつた・・・」

蒼牙「思い出してくれたか・・・ならむこうで俺達人類を見守つて
いてくれ。」

セイヤ「・・・ああ・・・」

セイヤは砂となり風にのり消えた。

づく

声援（後書き）

次回最終回

日常

数ヶ月後

蒼牙「まつずい！？ 遅刻だ遅刻！？」

アイリ「ちょっとネクタイ忘れてるわよ蒼牙！！」

あの戦いから数ヶ月後、また武藤家に口常が訪れた。

アイリ「はあ、毎日毎日・・・まあ・・・」

アイリは窓を開け空を見上げる。

アイリ「蒼牙が馬鹿したら天罰頼むわよ？セイヤ。」

・・・・・

数ヶ月前

蒼牙はヘルと戦いを終え山を降りみなと再会をした。

龍一「大丈夫か蒼牙！？」

蒼牙「ああ・・・」

榎原「良かつたな・・・どうした浮かない顔して？」

タクヤ「どうせ敵に同情したんだろう？」

蒼牙「隠せないか。」

「アイリ」「あいつはどうなったの?」

蒼牙「これから世界を見守るって約束した。」

・・・・・

蒼牙「はあはあ・・・お?」

蒼牙は空を見上げる。

蒼牙「セイヤ・・・見ていてくれよ、これから未来を!・!」

蒼牙はその場から走り去った。

おわり

日常（後書き）

今回は仮面ライダーヤイバは完結です、たくさんのお心援ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9300u/>

仮面ライダーヤイバfinal 雷対影 時空大決戦

2011年8月11日22時28分発行